

足掛け三年に及ぶコロナ禍。未だ出口は闇の中。日常生活も学校生活も様々な制約を受け、閉塞感に苛まれていらっしゃる皆さんの思いを重く受け止めています。そして若い世代の人々が「ロストジェネレーション」などと言われるのを耳にすると、不憫でなりません。今日は、どんな時も希望を捨てず、前を向いて、上を目指してほしいという話です。

「ロストジェネレーション」という言葉が初めて使われたのは、1920年代に遡ります。第一次世界大戦の従軍経験を経て、既成の価値観に懐疑的になり、目標を見失い、社会の中で迷い彷徨っていた世代。コロナとよく比較されるスペイン風邪のパンデミックもほぼ同時期に起こりました。ご存じのように、「ロスト"lost"」は"lose"の過去分詞で、「失われた」以外に「迷子の」「行き場の無い」という意味もあります。「失われた世代」よりも「道に迷う世代」こちらの方がわかりやすいと思います。その後も、1990年代アメリカで薬物乱用や犯罪を繰り返した世代や日本のバブル崩壊後の就職氷河期の世代もそう呼ばれました。そして、今回のコロナ禍ということになるわけです。時代は変わっても、大きな脅威、戦争やパンデミックは絶えることはありません。先人たちも時間をかけて、じっと耐え、希望を失うことなく、知恵を絞って、激動の時代を乗り越えてきたのです。

今、迷っている人はいますか。さしずめ卒業後の進路でしょうか。進路というと、まず「選択」という言葉が思い浮かびます。これまで、一般的に進路は選択するものと考えられていたからでしょうか。大学へ行くのか、行かないのかという選択。どこの大学を目指すのかという選択。何を学び、卒業後はどのような職業に就くのかという選択。すなわち、選択肢が用意されていました。しかしご存じのとおり、近い将来AIの発展によって多くの職業がなくなってしまうのではないかとされています。「まあ、それはそれ。その時にある選択肢から選びます。」などという対応が現実的なものかもしれないし、また道に迷ってしまう人も多いのかもしれません。でも、それでいいのかと言いたいのです。受動的に与えられた選択肢で満足するのか、不毛な時間を繰り返すのか、それとも主体的かつ積極的に一步進んで、自己実現のために新たなことを追い求め、自ら進路を切り拓いていくのか。

以前紹介したBTSの「私たちは、ロストジェネレーションなんかじゃない。なんでも大歓迎！ウエルカムジェネレーションだ！」という言葉のように、ポジティブに行きたいところです。*"You'll never find a rainbow, if you're looking down."*「うつむいていたら虹は見つからない。」こちらは、チャップリンの言葉です。うつむいて道に迷い、暗闇に迷う世代などと呼ばれることをよしとせず、どんなことでも受け入れ、前を向いて進んでいく。これからの進路は「選択」ではなく、「開拓」という言葉の方がふさわしいと思います。豊多摩の学友らしく、明るく元気に、伸びやかに、真摯に、そしてポジティブに。明るい光はすぐそこにあります。道なき道を開拓していく皆さんにエールを送ります。

*Touch the Sky! TOYOTAMA!*